

1930年代とストライキ小説

——『ストライキ!』から『疑わしき戦い』まで——

前 川 玲 子

(1) ストライキ小説の時代的背景

1930年代アメリカの社会的背景と文学的想像力の関連を探るうえで興味深いのが、ストライキ小説と呼ばれるジャンルである。本稿では、1930年代のストライキ小説の中から、メアリー・ヒートン・ヴォルス (Mary Heaton Vorse) の『ストライキ!』 (*Strike!*, 1930)、ウィリアム・ローリンズ (William Rollins) の『前方の影』 (*The Shadow Before*, 1934)、ロバート・キャントウェル (Robert Cantwell) の『豊かな土地』 (*The Land of Plenty*, 1934)、そしてジョン・スタインベック (John Steinbeck) の『疑わしき戦い』 (*In Dubious Battle*, 1936) をとりあげる。

大恐慌の直接の引き金になる 1929 年 10 月のニューヨーク株式市場の暴落の約半年前に起こったギャストニアの繊維労働者スト、1930 年初めのアバディーン製の材工場スト、そして、1933 年前後に多発したカルフォルニアの果樹園労働者ストが、これらの小説の題材になっている。恐慌下での人員削減に加え、スピード・アップなどの合理化促進や賃金カットは、特に非熟練、未組織労働者の労働環境や生活水準を劣悪なものにしたことが、ストライキの発端となり、これらの小説の具体的な背景となっているのである。

しかし、1930 年代のストライキ小説を特徴づけているのは、困窮した労働者の経済闘争の写實的描写というよりも、そうした闘争を来るべき階級闘争の

前哨戦としてドラマ化する傾向である。こうした傾向を生み出した要因の一つは、1930代の作家に直接、間接の影響を与えたアメリカ共産党が、1928年から「極左」路線を打ち出し、「腐敗」したAFL（アメリカ労働総同盟）の外部に党主導の戦闘的な組合を作る方針を決定したことであった。1935年以降、「人民戦線」路線への転換によって、この「二重組合主義」（dual unionism）を放棄するまで、共産党は特に南部や北西部の非熟練労働者の組織化に力をいれた。『ストライキ！』や『前方の影』の繊維労働者ストを指導した全国繊維労働者組合（National Textile Workers Union）は1928年に、『疑わしき戦い』のモデルとなったピーチ・ストライキを指導した缶詰製造・農業労働者産業組合（Cannery and Agricultural Workers Industrial Union）は1931年に、共産党の新方針のもとで結成されている¹。

このような戦闘的な労働運動の出現と軌を一にして始まったのが1920年代末からのプロレタリア文学運動であった。左翼文芸雑誌『ニュー・マッシュズ』の編集者マイケル・ゴールドは、1929年1月に発表された論文「若き作家たちよ、左翼戦線に参加せよ」の中で、工場労働者の生活体験と労働現場の直接の見聞に基づいた作品を書くことを奨励した²。ゴールドの呼びかけに応じるように、1930年代前半には、多様なプロレタリア文学の試みがなされた。中でも、同じ時期に展開された共産党主導のストライキを題材にして、戦う労働者や党员オルグを主たる登場人物にしたストライキ小説は、プロレタリア小説の代表的なサブ・ジャンル³となったのである。

しかし、ストライキ小説は、いわゆるプロレタリア作家によってのみ書かれたわけではない。1930年代には、シャーウッド・アンダーソンやスタインベックのようにプロレタリア文学運動とは一線を画す作家たちがストライキ小説を手がけている。ストライキをめぐる個人と群衆との緊張関係と加速される暴力のテンポは、当時の作家の想像力を刺激し、独自の小説世界の造形へと向かわせたのである。ここで扱う四作のストライキ小説には、階級闘争とそれに続くあるべき社会に関する個々の作家の想念が投影されている。そこに描かれて

いる指導者と大衆の関係、個と集団との葛藤、そして階級闘争のビジョンを追いつつながら、1930年代に生きた作家たちの問題意識の多様性と共通性を浮き彫りにしていきたい。

(2) リーダーと大衆——『ストライキ！』

1929年の春、紡績工場の密集した南部のピードмонт高原地区一帯にストライキの火の手があがった。なかでも、全従業員の90%にあたる1800人の繊維労働者が参加したノース・カロライナ州ギャストニアのローレイ工場のストライキは、警官、州兵、自警団を巻き込んだ町ぐるみの階級闘争の様相を呈した。闘争の過程で、警官と、ストライキの中心になっていた女性工員が死亡し、警官射殺をめぐる裁判では、フレッド・ビール⁴をはじめとする指導者に有罪判決が言い渡された。

ギャストニア・ストライキの劇的な展開に刺激されたのか、1930年から34年にかけての数年間に、ここから題材を取った小説が六作発表されている⁵。その第一号が、ヴォルスの『ストライキ！』である。1912年のローレンスの繊維労働者ストや1919年の鉄鋼ストなど主要な労使対決を追い続けてきたベテラン・ジャーナリストのヴォルス⁶は、ルポルタージュに近い手法でギャストニアのストライキの経過を伝えている。

だが、そのノン・フィクション的要素にもかかわらず、ヴォルスの作品は、二つの点で、プロレタリア小説の原型的な性格⁷をもっている。第一にあげられるのは、若い新聞記者ロジャー・ヒューレットが階級闘争の必然性に目覚めるという教養小説的な側面である。ストライキ指導者のフェルディナンド・デーンとの出会いから、デーンの死に至るまでの主人公の政治的成長を辿るというイニシエーションのドラマになっている。プロレタリア小説の原型的な第二の点とは、ストライキに参加した労働者および自警団などの群像を描くことで、集団となって行動する人間たちのダイナミズムに焦点をあてていること

である。

『ストライキ!』の冒頭で、北部からやってきて工場のストを指導するディーンは、労働者からは神のように慕われる一方、ストライキに敵対する地元民からは悪魔のように恐れられている人物として登場する。しかし、ストの取材を続けるにしたがって、ロジャーは、南部での厳しい闘争を指導することの重荷に耐えかねている一人の気弱なリーダーとしてのディーンを再発見する。ディーンを中心とするオルグ仲間も一枚岩の結束を誇っているわけではなく、闘争の路線や活動をめぐって不協和音が絶えないことが、ロジャーにもわかってくる。例えば、女性オルグのイルマは、警官や民兵に対する挑発になるとして労働者が銃を持つことに反対するディーンの方針の結果、銃がなくては手足をもぎとられたも同然と感じる男性労働者がピケ隊に加わらず、女性工員が警官との衝突の矢面にたたされることに割り切れなさを感じている。さらに、救援対策専門の女性活動家ドリスは、資金集めやスト中の食料や薬品の確保、病人の世話に忙殺される毎日のなかで、面倒な日常的活動に無頓着なディーンに強い不満を抱いている⁸。

実際のストの指導にあたっても、ディーンが難しい局面に対処しきれない様子が、ロジャーの眼を通して描かれる。自警団による組合本部の襲撃、工場主の所有する住宅からの強制退去命令などの攻勢が重なり、労働者の志気が低下する中、ディーンを選んだ戦術——スト破りをしている労働者を組織化して新たなストライキに突入させるという戦術は完全に失敗する。予定していたストは起こらず、工場内の労働者と合流しようとしたピケ隊は警官に包囲されて四散状態となり、工場主の敷地からの強制退去の後に建設されたテント・コロニーに逃げ帰る。自警団による襲撃の噂がひろがり、パニック状態に陥ったコロニーに、酒に酔った警官三人がやってきて、銃をもって警備していた労働者と小競り合いの末、銃撃戦となる。その過程で一人の警官が射殺され、ストライキ参加者のほとんどが逮捕され、また自警団によってコロニーは完全に破壊される。予測不可能な事態が次々に起こったとはいえ、ディーンの状況判断の甘さ

と、指導力のなさが闘争の敗因の一つであることが、暗に示されているのである。

このように、ヴォルスの描くディーンは恐れを知らぬ強いリーダーでもなければ、事務的能力のある有能な官僚タイプでもなく、周到で緻密な戦術家でもない。あえていえば、労働史に残る闘争の表舞台に偶然の出番を与えられた普通の人間ということになる。ヴォルスは、イルマやドリスの視点を導入することでディーンを批判的に描き出すと同時に、ロジャーの同情的な視点から労働運動の指導者という立場に立たされた普通の人間の迷いや戸惑いを伝えている。

しかし、小説の終盤では、著者はそれまでの描き方とは違い、スト労働者から寄せられる信頼に全身全霊で答えようとする勇気ある指導者ディーンを作り出す。警察官殺害の首謀者の罪で有罪判決を受けたあと保釈となったディーンは、弁護士が北部に一時身を隠すことを勧めるのにも耳を貸さず、スト中の労働者の懇願に答えて、工場前でのピケ隊の先頭に立つ。今度こそ組織化が成功し、スト破り中の労働者は新たなストライキに突入し、工場から溢れ出てピケ隊に合流しようとするが、混乱のなか警察の撒いた催涙ガスから逃げようとする非武装の労働者数人とディーンが射殺される。

『ストライキ!』の結末は、殺された労働者達とディーンの葬式と集会というプロレタリア小説の常套的ともいえる終幕になっている。残された指導者の一人は、「繊維労働者の組合を樹立する」ために、「南部全体に連帯をもたらす」ために、「我々は闘い続けねばならない」と言う。そして今までストライキの傍観者だったロジャーが、自分は「僕自身の階級を失った。かといって労働者の階級に属してもいない。今や国をもたぬのも同然だが、彼ら労働者の行こうとしているところに、その終着駅がどこであろうとも、一緒に行かなければならない」⁹と決意するところで小説は終わっている。

史実とフィクションとの関係という面から見ると、このような終幕になったのは、ヴォルスが『ストライキ!』を書くにあたって、ギャストニアのローレイ工場でのストライキ闘争と、警官に背後から撃たれて六人の繊維労働者が射

殺されたノース・カロライナ州マリオンでの事件を合成させたからだった。彼女は、ディーンらの裁判の結審前にマリオンに飛んで取材をしたというから¹⁰、二つのストライキ闘争に連続性をみたのも肯ける。しかし、現実のギャストニアのストライキ闘争は、五年から二十年の懲役刑を言い渡された七人の指導者の中で、ビールを含む数人がソビエト連邦に逃亡¹¹することで終焉を迎える。恐らくこのような皮肉な幕切れをヴォルスが知る前に小説は完成していたのではないかと思われるが、史実に忠実に描かなかったのは時間的な偶然のせいばかりではなく、指導者と大衆との関係についての著者の独自の考え方が影響しているのではなかろうか。

人間的ではあるが優柔不断で弱い指導者として描いてきたディーンの生涯を労働運動の殉教者として終わらせたのは、ヴォルスが、ディーンをヒーローとして理想化しようとしたからではないと私には思える。むしろ、裁判を含む長いストライキ闘争を支えてきた大衆のエネルギーとの接触によって気弱なリーダーから死を恐れないリーダーに成長する姿を描くことで、肯定的な大衆像を作り出そうとしたのである。『ストライキ!』の中で、ストライキに参加したギャストニアの労働者たちは忍耐強く、困難な局面に粘り強く立ち向かっていく人々として描かれている。特に個人としては弱い立場の彼らが、個体としての限界を越えて、「何か自分たちより大きなもの」¹²に統合されていく時のエネルギーに、ヴォルスは未来のあるべき社会の可能性を見るかのようなようである。指導者の曖昧な方針と、出たとこ勝負のやり方にもかかわらず、労働者自身は主体的に、創造的に活動する。例えば、労働者のためのバラードのシンガー・ソングライターとしてストライキ闘争の中心となるマミー・ルエスは、乗っていたトラックが自警団に襲撃されて射殺されるまで、労働者の権利を守る闘いを続ける。このような『ストライキ!』の中の大衆像は、ヴォルスが、労働運動、さらには階級闘争を牽引するのは少数の指導者ではなく大衆の集合体としての力だと信じていたことを示唆している。しかし、彼女が大衆の不定形なエネルギーがいつも善のベクトルに働くと楽観していたわけではない。

集団となって行動する人間の二面性を、ヴォルスは、地元のストライキ指導者の一人デューイの口を借りて述べている。「集団となった時、人間は最上のものになるか最悪になるかのどちらかだ。彼らは一丸となって、美と犠牲の危険な高みにまで上りつめる。そしてまた、彼らは一丸となって、血が見たくて獲物に飛び掛かる猟犬の一群にも成り下がる。普通の人間はこうした両極の間を行き来しているのだ」¹³と。『ストライキ!』の中で、ヴォルスは、頭から覆面をかぶって組合本部を襲う自警団の「暴徒」と、テント・コロニーを建設したりディーンらの葬式に集まってくる労働者や市民の「群集」を区別することで、悪玉の集合性と善玉の集合性の間に明確な線引きをしたいと願っていた。しかし、最終的には、労働者側にせよ、かれらに敵対する側であれ、集団ヒステリーの中で、個人が集団に呑み込まれ、意図していなかった行動をとるといふ、その予測不可能性においては、集合体の悪と善のベクトルは表裏一体であることを、ヴォルス自身も認識していたのである。

『ストライキ!』は、ヴォルスの労働運動に対する深い共感と、労働者との絆の意識から生まれた作品である。闘争を持続しようとする労働者たちの決意と、ブルジョア階級に属しながら労働者たちと共に歩いて行こうとする新聞記者ロジャーの決意で締めくくられるこの作品が、プロレタリア小説の初期の代表作の一つ¹⁴と受け取られたことは不思議ではない。しかし、この作品の指導者像や大衆像は、少数の指導者に大衆運動を牽引させようとする党の方針に対する作者の不信と、同時に、不定形な大衆のエネルギーの予測不可能性に対する作者の不安を反映している。その意味で、『ストライキ!』には、党の路線とは一線を画すヴォルスの独自の思考と感性が見られるのである。

(3) 労働者とインテリ ―『前方の影』

『前方の影』は、『ストライキ!』をはじめとするギャストニア・ストライキに触発されて書かれた一連の小説の最後のものである。作者のローリンズは、

プロレタリア作家と推理作家という二つの顔をもつ作家¹⁵であり、ヴォルスの単刀直入で歯切れの良い語り口と比較して、小説全体が霧で覆われたようなミステリー仕掛けになっている。物語の冒頭で、ポルトガルの小さな港に停泊するアメリカ行きの船をじっとみつめる少年が、アメリカン・ドリームの実現のために自分の階級を裏切りスト破りの先頭にたつラモンであること、早朝に仲間の運転するオートバイで密かに町に入り、工員として工場のゲートをくぐるのが、共産党員のオルグでストライキのリーダーとなるマーヴィンであることは、物語の進行とともに明らかになってくる。『前方の影』の独自性は、『パルティザン・レビュー』の書評でフィリップ・ラーヴが絶賛した「心理的リアリズム」¹⁶に加えて、推理小説のサスペンスの要素をプロレタリア小説にとりいれる試みをした点に求められるのかもしれない。

『前方の影』は、『ストライキ!』と同じように、労働者の組織化とスト突入から自警団による組合ホールの襲撃、警官の死と裁判というローレイ工場のストライキ闘争の経過を踏まえているが、史実を比較的忠実に伝えている前者に対し、かなり大胆なフィクション化を推し進めている。例えば、作品の舞台を南部からニューイングランドの工場町に移し、ヴォルスが強調した南部の特殊性からくる暴力のエスカレートという視点を退けて、どこでも起こりうる事件であるという普遍的性格を与えようとした。また、工場の所有者をニューヨーク在住のユダヤ人とし、その息子でハーバード大学卒のハリーがラディカリズムに惹かれて、ついには労働者への連帯のあかしとして父親の工場に放火したあと自殺するというサブ・プロットを盛り込んでいる。

ローリンズは、ストライキという階級間対立が、逆にいままで接触のなかった社会の諸階級、諸階層、さらには多様なエスニシティーに属する人間を運命共同体のなかにまきこんでいく様子を、大きなパノラマとして描こうとした。彼の小説世界では、登場人物たちは、階級、階層を縦断し、偶然的ともいえる出会いを繰り返す。例えば、自警団の長となる工場の現場監督のセイヤーは、職場の班長にすぎないポルトガル人のラモンを毎晩のように自宅に招き、欲求

不満の妻が20歳近く年下のラモンと不倫関係になるのを知らずに手助けすることになる。シニカルなインテリであるハリーは、ニューヨークの食堂でたまに隣合わせにすわったストライキ指導者マーヴィンと話をするうちに、父親を裏切って労働者の側につこうと決心する。

『ストライキ!』の中では、労働者階級と、経営者や町の有力者を中心とするブルジョア階級との間には、明確な経済的利害の対立があり、それぞれが一枚岩の結束をもって対決していることが想定されている。労働者がスト破りをするのは経済的に迫いつめられた末のやむなき選択であるが、己の属する階級への忠誠心は捨てていないことが強調される。一方、「裕福な人々」は老若男女を問わず、自分たちの現在の安定した生活を脅かす輩に一丸となって敵対するものとして描かれている。これに比較して、ローリンズは階級・階層を固定したものではなく流動的なものとして捉え、経済的な階級利害ばかりではなく、様々な心理的、道徳的、観念的な要因が個人を突き動かすと考えていた。

『前方の影』の中で、こうした一つの階級の内部の二極分解過程を劇的に示しているのが、貧しい移民であるが故に上昇志向の強いラモンと、単調な仕事、低賃金、横暴なボスに怒りを覚えてストライキの中心的存在となるアイルランド人の女子工員ミッキーの対比である。現場監督のセイヤーに機嫌をとって中間管理職への階段を登っていこうとするラモンは、自警団にも積極的に加わり、かつての恋人ミッキーをはじめとするスト中の労働者に敵対する。

しかし、ラモンは労働者階級に対する裏切り者であるにもかかわらず、ローリンズは彼を必ずしも否定的には描いていない。ラモンはポルトガル人というエスニシティーの制限から抜け出して真のアメリカ人になりたいと願っており、仲間からの孤立も恐れず彼なりの信念を貫いている点で、たくましさという美徳を付与されている。それに対して、逆の意味で自分の階級を裏切ることになるハリーは、労働者階級に味方することで、金持ちのユダヤ人であり、無為に過ごす知識人としての罪の意識と孤立感から抜け出そうと不毛なあがきを続ける人物として、同情的かつ否定的に描かれている。恋人となったハリーから工

場放火計画を打ち明けられたミッキーは、金持ちのラディカルの自暴自棄な冒險主義のために労働者の生活の場が奪われることを危惧して、いまや敵となったラモンに計画を知らせる。ラモンらによってぼやは消し止められるが、ハリーは、どちらの階級からも信頼されないまま、自殺の道を選ぶしかないのである。

ミッキーやラモンを初め、フランス人、ポーランド人など多様なエスニティーに属する労働者階級のヴァイタリティーが強調されているのに対して、最も痛烈な批判の対象になっているのが、ピューリタンの子孫として100%のアメリカニズムを誇るセイヤーである。自警団の長として外国人やラディカルの一掃を叫ぶセイヤーは、現場監督としての利害を越えた神経症的な脅迫観念に突き動かされている。その自閉症的な娘と性的欲求不満の妻も、セイヤーの神経症の犠牲者として描かれている。『ストライキ!』の中では単なる暴徒として登場した自警団を構成する個人の病理学的問題に焦点をあて、それを上流階級にあこがれ、労働者階級を恐れるセイヤーのようなプチブルの不安と結びつけることで、ローリンズは、より多面的な階級対立の理解を志したと思われる。

『前方の影』をプロレタリア小説として見た場合、その結末は、『ストライキ!』との類似性と相違を明確にする。ヴォルスが、新聞記者の階級意識の目覚めで小説を締めくくったように、ローリンズも、労働運動に身を投じようとするミッキーの決意で、話を終わらせている。しかし、『ストライキ!』の結末では、労働者たちがディーンらの葬式で団結を誓い合ったのに対して、『前方の影!』では、賃金と労働条件について経営者側が僅かな譲歩をしたことで、労働者は職場に復帰し、ストライキの中心的メンバーも、ミッキー以外はすべて闘争から去っていく。

さらに、ロジャーの階級意識の目覚めが観念的だったのに対し、ミッキーの新たな階級意識の誕生は、彼女の体内に宿る新しい命に象徴されている。生まれてくる子供の父親がラモンなのかハリーなのかはわからないが、「そんなことは今は問題ではない」と感じるミッキーは、次の世代のためにも、「もう後

戻りは出来ない』¹⁷と考える。こうしてローリンズは、ミッキーを一人の戦闘的な労働者としてだけではなく、未来を担う子を宿す母として描くことで、労働者階級の生命力を強調し、未来への期待を表明している。

『前方の影』は、階級内部の分化が絶えず起こる流動的で可動的なアメリカ社会の特色を反映すると共に、そうした社会の中で階級的な連帯を保つことの困難さを暗示している。もし、労働者階級内部の連帯も危うく、かつブルジョア階級のラディカリズムも信頼に値しないならば、ミッキー一人に委ねられた闘いは限りなく敗北に近い闘いに違いあるまい。

(4) 工場は誰のものか——『豊かな土地』

ローリンズの『前方の影』と同じく1934年に出版されたロバート・キャントウェルの『豊かな土地』は、ストライキ小説の中でも文学的完成度の高い作品として評価されてきた¹⁸。ルポルタージュ的な要素の強い従来のストライキ小説に比べ、個々の登場人物に焦点をあて、その行動や会話の合間に「意識の流れ」的な手法を取り入れるなど、プロレタリア小説に欠けるとされる複雑で曖昧なニュアンスをテキストの中に織り込む試みが見られる。群集の一部となる前の個々の人間に別々にスポットライトを当て、集団の渦に解き放ったあとに再び、個人へと還元させる手法には、ローリンズとも通じるところがある。

『豊かな土地』は、1930年代の初めに起きたワシントン州アバディーン製の製材工場でのストライキから題材を得ている。同じストライキを舞台にして、他にも二作の小説が発表されている¹⁹。当時、アメリカ北西部の主要産業の一つだった製材業に従事する労働者は、南部の繊維労働者と同じように、低賃金、労働量の増加に苦しみ、かつ、絶えず事故の危険にさらされながら、何らの労災保障も与えられていなかった。一方、北西部には、20世紀初めに世界産業労働者同盟(IWW)が戦闘的な労働運動を繰り広げた歴史があり、ストライキが始まると、製材業界を独占する木材トラストによる労働者の弾圧は熾烈を

極めた²⁰。ワシントン州生まれのキャントウェルは大学を中退後 1925 年から 29 年までアバディーン製の材工場で働いた経験があり、労働現場での観察と体験に基いたプロレタリア小説を書くのにふさわしい作家²¹と考えられた。

『豊かな土地』の第一部では、夜間シフト中の製材工場の突然の停電が引き起こす混乱が、シュールリアリズムともいえるようなタッチで描かれる²²。原因不明の停電によって工場は機能麻痺に陥り、効率的な労務管理を推進するために雇われているマックは、彼に反感を持つ労働者に囲まれパニック状態になる。誰かに停電の責任を押し付けたいマックは、日頃から彼の権威を認めようとし、ない電気工ヘイゲンに責め立て、停電の原因は発電所の事故によるものだという適切な指摘にも耳を貸さない。労働者たちが、工場の地形や機械の配置を体で覚えているのに対して、マックは完全に方向感覚を失い、ついには、ベルトコンベアーの中に落下して工場の地下に入り込んでしまい、同じく落下した工場長のマクマーンと共に、かろうじて脱出する。こうして、効率の良さが売り物の資本主義社会のミニチュア版ともいえる工場の責任者たちは、システムの歯車がわずかに狂い始めるやいなや、自らも機能停止状態に陥っていくことが暗示されるのである。

一方、第一部のタイトルである「(電) 力と光」が暗示するように、資本主義社会の権力と栄光が失墜するのとは対照的に、ヘイゲンらは、暗闇のなかで、停電中に落下した材木の下敷きになった一人の労働者の救助に奔走する中で、新しい力を獲得していく。事故の噂を聞いて、どこからともなく集まってきた工員たちは、誰の指示をうけることもなく一つの目的のために力をあわせる。しかし、電力が戻ると同時に権威を取り戻したように感じるマックは、怪我人の救助のために必要な懐中電灯を彼から奪い取ったインディアンウィンターズと、友人を弁護しようとしたヘイゲンの二人を首にすると宣言する。ただでさえ賃金引き下げとノルマの増大で不満を持っていた工員たちの怒りが一気に高まり、工場長マクマーンに解雇撤回を迫る。その気迫に負けてマクマーンが譲歩したことで、労働者たちが、自分たちの新しい力を自覚するところで第一

部が終わる。

第二部は、そのタイトル「労働者の教育」が示す通り、同じ工場に勤めるヘイゲンの息子ジョニーが、ストライキ闘争と、その過程での父親の死をとおして、新たな階級意識を獲得するという内容になっている。停電のあった夜の翌日は独立記念日で、アメリカの豊かさを誇るパレードが各地で行われている中で、ヘイゲンの家では、電気代未払いのため電気が止められるかもしれないと警告される。経営者側がヘイゲンらの解雇のもくろみを捨てていないという噂を聞きつけて、同じ居住地に住む労働者たちが、ウィンターズの家を集まり、いざというときのストライキの可能性を話し合う。IWWの生き残りのフィンランド人ヴィンカールをのぞいては、ストライキの経験のあるものはおらず、組合もなく、特定の党からのオルグもないという点で、キャントウェルの描く労働者たちは、自然発生的な集合体である。キャントウェルは、この作品で、特定のリーダーの指導を受けない自主的に開かれた労働者の連帯の可能性を模索したといえよう。

独立記念日が明けて出勤した労働者たちは、ヘイゲン、ウィンターズを含む20人近くの工員の解雇のニュースを知らされる。その日の昼間シフトと夜間シフトの交替の瞬間、直前にストライキに入った昼間シフトの労働者は工場の外にいた夜間シフトの労働者と合流し、彼らは集団となって工場の事務所を取り囲む。この瞬間の感動は、それまで工場勤めを嫌って町を出て行くことばかり考えていたジョニーの心に深く刻まれて、その後ピケ隊に参加する時も、警官にこん棒で殴られる時も、彼の支えになる。しかし、自然発生的な闘争は、ヴォルスやローリンズが描いたストライキと同じように、混乱のうちに敗北の運命を辿る。

ストライキが継続し、スト破りの労働者が外部から大量に工場に運ばれるという状況のなか、ピケを張る労働者の志気も低下してくる。ある豪雨の夜、数が次第に減ってきたピケ隊は、倉庫に雨宿りしているところにスト破りの労働者も入ってきて、混乱のなかで、ピケ隊と間違われたスト破りの労働者が警官

に射殺され、また、一人の警官も撃たれる。こうしたなかで、ヘイゲンやジョニーを含むスト中の労働者は工場内に入り、そこを一晩占拠する。IWWのサンディカリズムの戦術にこだわるヴィンカールは、占拠中の有利な立場を交渉に利用しようと主張して、警察に全員逮捕される前に即座に外に出ようと提案する他の労働者に対立する。夜明けに、工場は警官に取り囲まれ、直接マクマーンに話がしたいとして外に出たヘイゲンは、警官との銃撃戦の犠牲になる。ヴィンカールと共に工場の地下から外に逃げようとしていたジョニーは、父親の死を知らされ、ぼう然として、暗闇が訪れるのを待つところで小説は終わっている。

第一部で資本主義社会のシステムの脆さと、それと対照的な労働者の自然発生的な共同性と連帯の強さを見事に表現したキャントウェルが、第二部で、そうした連帯の中から建設的な労働者コミュニオンがうまれる可能性にたいして悲観的だったのは、注目に値する。小説をこうした結末で終わらせた理由の一つを、キャントウェル自身は、「労働者が工場を占拠した場合どのような事態になるのか想像がつかなかったからだ」²³と説明する。一方、『アメリカのラディカルな小説』の著者ライドアウトは、キャントウェルのような中産階級出身の作家が、実際には労働者側の勝利で終わったストライキを悲劇的な敗北でおわらせたのは、「プロレタリアートが究極的に勝利するのかどうかについての彼らの心の中の不確かさのせいだ」²⁴と示唆する。ライドアウトの言う「不確かさ」の中身を検討してみるなら、労働者階級に共感と同情を寄せる中産階級の作家には、経営者、警察および自警団の圧倒的な力の前では労働者は常に弱者であり、敗北を余儀なくされるといった悲観論があったと思われる。同時に、階級闘争が労働者の勝利でおわった時に、二つの階級の間中に位置する中産階級のインテリがおかれる立場についてのアンビバレントな想いが重なっていたのではないだろうか。

『豊かな土地』の登場人物のなかで、キャントウェル自身の境遇に最も近い大学中退の工員ウォルトは、労働者に共感を抱く好青年として登場するが、次

第に、ポーランド人の女子工員をレイプしようとし、さらにカールやマクマーンの手先となって仲間の労働者に敵対する「悪党」に変身する。最後に登場する場面では、ウォルトは、スト破りの労働者殺しの罪を着せられようとするウィンターズの運命を心配しながら、スト労働者と厳しく対立するカールのアシスタントとしての仕事を情性的に続ける中途半端な人物になっている。このような作中人物の描き方をとってみても、階級闘争の行方と、その中での自らの役割に対するキャントウェル自身の漠然たる不安が、労働者の自然発生的な連帯への期待と微妙に同居していることが窺われるのである。

(5) 労働者のディストピア——『疑わしき戦い』

いままで見てきた3人の作家——ヴォルス、ローリンズ、キャントウェルが、1930年代はもとより、その後もプロレタリア作家というレッテルを張られているのに対し、スタインベックは、プロレタリア文学運動から影響を受けながらも、プロレタリア作家のように「政治に利用される」ことのなかった偉大な作家という評価を受けてきた²⁵。しかし、偉大な作家はプロレタリア作家のような「政治的偏向」がなく、人間の尊厳を謳歌する普遍的なヒューマニズムを体現する作品を書くという通説は必ずしも鵜呑みには出来ない。「マルクシズムや共産党が文化全体の重要な一部であった時代に小説を書いた作家」²⁶の一人であるスタインベックのストライキ小説『疑わしき戦い』は、1930年代の「マイナー」なプロレタリア作家の問題意識を独自の方向に極限にまで推し進めた極めて政治的な小説である。

1930年代前半のストライキ小説をスタインベックがどの程度読んでいたかは定かでないが、『疑わしき戦い』は一面では、プロレタリア作家の手によるストライキ小説の様々な要素の集大成とも読める。スタインベックは、1933年8月に起こったカリフォルニア州テュラーレ郡のタガス桃園の「ピーチ・ストライキ」をモデルにこの小説を書いたといわれる²⁷。現実のストライキを下

敷きにして「架空」の物語を作り上げていく方法は、それ以前のプロレタリア小説を踏襲している。他にも『疑わしき戦い』には、これまで扱ってきたストライキ小説との共通点が見られる。例えば、潮の満ち干のように盛り上がりと停滞を繰り返す、カリフォルニアの林檎摘み労働者のストライキ闘争の経過を伝えるルポルタージュ的な明解さはヴォルスの『ストライキ』を思い起こさせる。さらに、主人公の一人ジムが、下宿屋の一室から出て「党」幹部の事務所に入党の申し込みに出向く冒頭の場面の謎めいた雰囲気は、ローリンズの『前方の影』に似ている。そして、林檎園でのストの直接の引き金となる、IWW残党の老人の事故や、労働者コミュン建設の実験は、同じ北西部出身の作家キャントウェルの『豊かな土地』を髣髴とさせるのである。

しかし、別の読み方をすると、スタインベックの小説は、プロレタリア作家のストライキ小説の残酷なまでのパロディーであるともいえる。ストライキ闘争の戦術を新米党员ジムに説明するベテランのマックは、まるで、『ストライキ』の筋を追うように、警官か自警団の手によって殺された仲間の葬式で、労働者の団結が一気に強まるというシナリオを描いて見せる。このシナリオ通り、小説では、過激派党员ジョイが自警団によって、さらに、ジムが果樹園主の計略にかかり射殺される。仲間の死を革命のために「利用」すべきだと考えるマックは、ジムの血だらけの体を群衆に示して、ジョイの葬式の時とまったく同じ内容のアジ演説を始めるところで、小説は終わっている。

彼らは、プロレタリア小説的な文脈では、労働者に敵対する反動的な暴力の犠牲者である。だが、スタインベックは、二人の死は、革命のプロパガンダのために生け贄の血を求めるマックの願望が生み出した「殺人」でもあることを示唆する。マックが、ジョイの棺桶を開けて、彼の死体は奇麗すぎて敵の暴力のひどさを労働者に見せつける手段としては利用価値がないとつぶやくグロテスクな場面は、マック自身のなかのより陰湿な暴力の衝動を明らかにする²⁸。スタインベックがあえてジムの「殉死」と階級闘争の継続というプロレタリア小説の常套的な結末を選んだのは、労働者を反革命的な暴力の犠牲に供するこ

とで階級闘争の必然性を読者に訴えようとするプロレタリア小説を模倣しながら、その作為に潜むマックと同質のサディズムを暴露しようという意図があったと私には思えるのだ。

しかし、『疑わしき戦い』の中にプロレタリア小説のパロディー的要素があるとしても、それが明るいユーモアに満ちた戯画でないことはいうまでもない。ヴォルス、ローリンズ、キャントウェルが敗北したストライキ闘争の果てに臆げに見た労働者のユートピアの夢は、『疑わしき戦い』の中で、その陰画としてのディストピアの悪夢に変わっていく。このディストピアを上から作り出すのがマックらの指導者であり、下から支えるのが「集団人間」とシンパサイザーの医師バートンが呼ぶ1000人以上のスト労働者である。ここに表象されるスタインベックのリーダー像と大衆像は、それまでのストライキ小説になかった異質の問題意識を読者に投げかける。

これまで見てきた三つの作品の中では、いずれも、ストライキ闘争の自然発生性が強調されてきた。その最たる例は、IWW 残党のヴィンカール以外はリーダーらしきものが存在しない『豊かな土地』である。『前方の影』では、党員のマーヴィンがオルグとして登場するが、指導者としての積極的な役割が与えられてはいない²⁹。『ストライキ!』のディーンは、中心的な存在ではあるが、その役どころは、力強い大衆のエネルギーと信頼に支えられて成長する人間的なリーダーに過ぎない。しかし、『疑わしき戦い』では、ストライキは自然発生的な労働者の闘争ではなく、あくまで、共産党員マックと見習い党員ジムとが机上で練り上げた戦術を実践に移していく過程である。小説の大半は、実際に闘争に参加している労働者の姿ではなく、「連中にやる気を出させよう」と様々な策をめぐるマックとジム、さらに彼らの指導のもとで労働者を直接動かす争議委員長のロンドンらの秘密の会談が占めているのである³⁰。

マックは、ヒットラーやスターリンなど1930年代に出現した独裁者にも通じるような、教条的な硬直性と大衆蔑視の強い感情を持ち合わせた人物である。彼は、一面では、最も搾取されている季節労働者の経済的不満と、その表現と

してのストライキを階級闘争に転化させるために無報酬で、しかも日夜危険にさらされながら活動している献身的な党员である。だが、マックが経済的に追いつめられた労働者を、さらに直接の経済的利害から離れた終わりのない闘争に引き摺りこもうとするのは、単に党の綱領への忠誠心からではなく、生きるに値しない人間以下の存在としての大衆に対する侮蔑の念が根底にあってのことである。ジムやバートンは彼と同等の人間であり、党や革命のためというより自分を孤立から救うために生き延びてもらいたいと願っているが、林檎摘み労働者の運命にたいしては、彼らに敵対する果樹園主以上に無関心なのである。

マックの大衆、もしくは「集団人間」にたいする侮蔑の念は、彼らへの恐怖と隣あわせである。闘争の敗色が濃くなり、シンパサイザーから調達していた食糧は底をつき、小果樹園主アンダーソンの土地に建てられていた仮設キャンプ場からの強制退去を命じられるという事態のなかで、労働者の怒りが自分たちに向けられ殺されるのではないかという恐怖に彼は怯えはじめる。この恐怖は、労働者の眼を外敵へと向けさせるための暴力のエスカレートへとつながる。こうしてマックは、長期的な革命闘争の展望を説く党の綱領からも逸脱して、スト破りの労働者への暴行を奨励し、果樹園主の家の放火を容認し、またアンダーソンの納屋放火犯と目される少年にみずから暴行を加えるといった、闘争を自滅に追い込むような行動に走っていく。大衆は血を見ればその動物的な本能が刺激され闘志がわくと信じるマックは、いつか自分も必ず血祭りにあげられるという恐怖のなか、この自らが作り出したディストピアの外に出て自由を味わうことを夢見ながら、もはや方向性も目的も動機も「疑わしい」戦いを夢遊病者のように続けるしかないのである。

たしかに、独裁的な大衆操作を行う共産党员マックは、これまでのプロレタリア作家によるストライキ小説には見られなかったタイプである。だが、これをもって、スタインバックが反共主義的であったと考えることは短絡的である。むしろ、マックという反面教師を作り出すことで、左翼運動に同情的な立場から警告を発した書だと解釈することも不可能ではない。こうした解釈の前提と

なるのは、スタインベックが一貫してマックを否定すべき人物として描いたという見方である。マックの作り出したディストピアに絶望して姿を消す医師パートンの視点をスタインベックが共有していたとすれば、科学者の高みから、作者もまたマックを観察し、その病理を批判的に分析したことになる。

しかし、実際には、マックは、現代社会の病理の症例というよりも、生き生きとしたリアリティーをもった人物として描かれており、それに対して彼に従ったり反抗したりする「集団人間」の労働者は、マックの大衆にたいする優越感および侮蔑や恐怖を正当化するほど、絶えず腹をすかせ暴力的で、非理性的な存在として描かれている。つまり、スタインベックの描く大衆は、マックの頭のなかの大衆像から距離をおくよりも、むしろそれをなぞったものなのだ。スタインベックの『疑わしき戦い』には、20世紀初期の知識人に共通するとジョン・ケリーが指摘する大衆社会への嫌悪と「大衆の反乱」の恐怖、そして、大衆をコントロールできる強いリーダーへの憧れが反映しているように私には思える。一見マックの批判者に見えるパートン医師も、「集団人間」を細菌や細胞を見るように科学的に分析しようとする点で、知識人の優越した立場からの大衆の制御³¹を望んでいるマックの同類である。

スタインベックが、出版当時、最もすぐれたプロレタリア小説との評価を受けた³²『疑わしき戦い』のなかで、アンチ・プロレタリアともいえる大衆像、そして大衆をコントロールする独裁的なリーダー像を作りだしたことは皮肉なことである。画一化された大衆社会に住む個人主義者スタインベックは、マックの中に、短編「人を率いる者」(“The Leader of the People”)に出てくるジョディーの祖父のような、腹をすかせたら何をするかわからない西部開拓民を統率する強い指導者³³の孤高の姿を垣間見た。同時に、マックの作り出した労働者のディストピアと、マック自身の内なる混乱は、スタインベックをしてみずからの想像力の行方に不安を抱かせたにちがいない。『怒りのぶどう』

(*The Grapes of Wrath*, 1939) で、大衆への不信は信頼に、独裁的リーダーは民主的リーダーへと変わっていったのも、『疑わしき戦い』に凝縮された暗

い想念の影を払拭しようとしたためかもしれない。

(6) ストライキ小説と階級闘争のビジョン

『ストライキ!』から『疑わしき戦い』に至る四作のストライキ小説は、1930年代のアメリカの特殊な社会・経済状況の産物であると同時に、この時代の作家たちがアメリカにおける階級闘争にたいして持っていたビジョンを映し出す鏡でもある。

ヴォルス、ローリンズ、キャントウェルの三人のプロレタリア作家は、その人物造形や語りのスタイルにおいて極めて多様な資質を持っているが、共通して見られるのが、未来への悲観主義と楽観主義が奇妙に混合した「革命的敗北主義」への傾斜である。『ストライキ!』では、ディーンを含めた主な指導者と女性工員マミー・ルエスが射殺されるという「この世」での敗北の現実、葬式の後の集会での「あの世」での勝利の予言によって救いを与えられる。『前方の影』では闘争は敗北するが、唯一人戦いの継続を決意するミッキーとその生まれてくる子供に未来が託される。『豊かな土地』では、電気工ヘイゲンは無残に射殺され、工場を占拠した労働者も敗北の時を迎えるが、戦いは息子のジョニーに受け継がれることで、より良き社会の建設への希望は残されるのである。

このようなプロレタリア小説の底流に流れる革命的敗北主義は、1930年代前半の共産党の極左路線の下で流布した言説——個別の経済闘争に敗北する中から階級意識が醸成され、最終革命への道が用意されるという理論と無関係ではない。こうした考え方は、敗北によって直接の経済的打撃を被り、時には闘争の過程で命の危険にさらされる労働者にとってよりも、むしろ、遠い未来の革命にロマンティックな想いをめぐらすことができる中産階級出身の知識人にとって魅力的なものだったのである³⁴。

しかし、ヴォルスらの作品に投影されている革命的敗北主義は、より本質的

には、サクヴァン・バーコヴィッチの言う「アメリカの嘆き」のレトリックに類似している。バーコヴィッチによれば、ピューリタン以来のアメリカの知識人は、(1)旧世界からの脱出と新世界の約束 (2)新世界の墮落に対する嘆き (3)社会の構成員の改心による歴史の救済の予言という三段階の儀式的レトリックを採用してきた³⁵。『ストライキ!』、『前方の影』、『豊かな土地』の三作品にも、(1)資本主義社会の生き詰まりと理想の社会の出現の約束 (2)旧体制を守ろうとする反革命的勢力の攻撃による理想の一時的挫折にたいする嘆き (3)社会の矛盾を自覚した労働者の樹立する新世界誕生の予言というパターンが共通して見られるのである。

ヴォルスらの1930年代の作家たちは、社会の無限の進歩の夢が第一次世界大戦や大恐慌の悪夢へと変わっていくのを目撃した世代であった。だが彼らには、マルクス主義への「改宗」を通じて、「崩壊」した資本主義体制の廃虚から「新世界」へと脱出する道が残されていた。彼らは新しい社会の実現を楽観はしていなかったが、試行錯誤の後の社会の前進を信じていた点で、基本的に「進歩的」なパラダイムの枠内にあったのである。この意味で、プロレタリア作家の採用した革命的敗北主義は、理想と現実との落差に対する嘆きから改心を通じた理想の実現という「アメリカの嘆き」のレトリックを、マルクス主義的な歴史観の中で組み替えたものだったといえる。

だが、プロレタリア作家の革命的敗北主義には、こうした歴史の直線的発展を信じる前向き (progressive) な階級闘争のビジョンと同時に、中流階級出身の作家としての屈折した心理的要素も含まれている。その一つが彼らの極めて否定的な自画像である。ヴォルス、ローリンズ、キャントウェルの三人の作家には共通して、階級闘争を牽引するのは階級意識に目覚めた労働者大衆であって、中産階級のインテリは曖昧で信頼できない同伴者にすぎないという自虐的ともいえる認識が見られる。『ストライキ!』の最後で新聞記者ロジャーは、自らを革命の前衛たるプロレタリアートを支える微力な後方部隊として謙虚に位置づける。『前方の影』では、工場主の息子でありながらスト労働者のシン

パとなったハリーは、工場の放火という過激な行動に走った後、自殺してしまう。『豊かな土地』の大学生工員ウォルトは、経営者側の手先となってスト労働者に敵対する。こうした否定的な自画像³⁶は彼らの一見前向きな階級闘争のビジョンに潜む、後ろ向き（regressive）な心理的側面を示している。

彼らは、労働者の自律的なユートピアの樹立を夢見ている。だが、資本家階級と労働者階級の間位置する自分たちは、そのユートピアから究極的に疎外される運命であることを想うと、労働者の戦いが敗北し続けることを無意識に望むことになる。労働者を力強い存在として描きたいという衝動と、彼らを抑圧的な資本主義社会の無力で無垢な犠牲者という弱者の地位に留め置くことで心理的優位性を確保しようとする防衛本能がせめぎあうのである。その結果、プロレタリア作家は、労働者を理想化しながら他方で無力化するという矛盾した言語操作をおこなうことになる。人間としての「尊厳に満ちた」労働者が警官や自警団によって「犬のように」殺されるといったプロレタリア小説の常套的な表現は、こうした矛盾を端的に示しているといってもよい。

このようなプロレタリア小説の大衆像や階級闘争のビジョンの問題性をえぐったのが、スタインベックの『疑わしき戦い』であった。プロレタリア作家が労働者を反革命的な暴力の無垢な犠牲者として描き、彼らの哀れな姿を作家の眼というフィルターに映る物言わぬ被写体に落とし込めることで、感傷的な同情や復讐の怒りを喚起しようとする傾向に、スタインベックは疑問を呈したのである。

『疑わしき戦い』の中では、プロレタリア小説の中の大衆像はすべて転倒した姿で登場する。彼らは、暴力の犠牲者である以上に残虐な加害者であり、指導者にとっては同情や憐憫の対象であるよりも底知れぬ恐怖の対象である。プロレタリア作家とは対照的に、スタインベックは、集団となった人間は獲物をねらう猟犬以外の何物でもなく、大衆をコントロール出来る強い指導者なくしてはカオスの世界が出現するという不安を持っていた。スタインベックは、マックという独裁的なリーダーによる上からの労働者コミュニンの樹立の可能性

を探るが、マックと労働者の相互不信が高まる中、コミュニオンは暴力と裏切りの横行する恐怖政治の舞台さながらになる。しかし、自ら作り上げたディストピアで出口のない戦いを続けるのはマックだけではなく、スタインベック自身でもあるように思える。

プロレタリア小説に見られる革命的敗北主義が、敗北の要因を現体制を守ろうとする資本家の圧倒的な暴力に帰することで、労働者を殉教者として神格化する傾向をスタインベックは批判した。彼の嘆きは、反動勢力やスターリンのような独裁者に向けられる以上に、無知で非理性的で予測不可能な大衆に、あるいは人間性そのものに向けられていたのである。その意味で彼には、抑圧的な社会から解放された大衆を主人公にした社会の無限の発展という進歩的なパラダイムを受け入れることは出来なかったのである³⁷。こう考えると、スタインベックがプロレタリア作家の人間理解や階級闘争のビジョンに対して批判的視座を提供しつつも、それに代わる展望を提示しえないまま小説を終わらせるしかなかったのも不思議ではない。

『ストライキ!』から『疑わしき戦い』に至るストライキ小説に投影された個々の作家の階級闘争のビジョンは、1930年代の左翼的オーソドクシーに収斂しきれない多様性と深みを持っていたように思える。プロレタリア小説か否かという枠組みを越えて、これら四作の底流には、不可視の大衆にたいする過大な期待と漠然たる恐怖、そして、労働者の自然発生的な連帯から生まれる「新世界」への憧れと不安との間で揺れ動いた1930年代の知識人のアンビバレントな心情が読み取れる気がするのである。

注

1. アメリカ共産党は、1920年以降、労働組合教育同盟 (Trade Union Educational League) を作り A F L の内部で反対派活動を展開したが、A F L の幹部は左派の進出をくいとめるためにギャング団との関係を持つなど腐敗ぶりを示したとされる。1929年に労働組合教育同盟は労働組合統一同盟 (Trade Union Unity League) に改組され、その下で1932年までに A F L の外部に13の全国的産業別組合が組織された。全国繊維労働者組合の成立過程や繊維労働者のストについては、David Roediger and Philip S. Foner, *Our Own Time: A History of American Labor and the Working Day* (New York: Greenwood Press, 1989) 219-22 などが参考になる。また、缶詰製造・農業労働者産業組合の結成や、農業労働者のストについては *Bitter Harvest: A History of California Farmworkers, 1870-1941* (Ithaca: Cornell University Press, 1981) 128-66 に詳しい。なお、恐慌下の民衆運動については、秋元英一『ニューディールとアメリカ資本主義——民衆運動史の視点から』(東京大学出版会、1989年) などがある。さらに、アメリカ共産党の極左路線の時代 (1928-1935) や二重組合主義、さらに「人民戦線」路線への転換については、Irving Howe and Lewis Coser, *The American Communist Party: A Critical History* (1957; New York: Da Capo Press, 1974); Theodore Draper, *American Communism and Soviet Russia* (New York: Viking Press, 1960) などを参照されたい。
2. Michael Gold, "Go Left, Young Writers," *New Masses* (January 1929): 3-4, reprinted in *Mike Gold: A Literary Anthology*, ed. Michael Fosom (New York: International Publishers, 1972) 186-89.
3. アメリカのプロレタリア小説を、ストライキ、階級意識の目覚め、底辺生活者、中産階級の没落といった主な題材ごとに分類した最初の研究書は、Walter Rideout, *The Radical Novel in the United States* (Cambridge: Harvard University Press, 1956) であろう。その後の研究者も彼の分類を下敷きにしている者が多い。例えば、Fredrick J. Hoffman, "Aesthetics of the Proletarian Novel," *Proletarian Writers of the Thirties*, ed. David Madden (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1968) などがある。
4. ギャストニアのストライキの経過については、共産党員のスト指導者 Fred Beal の自伝である Fred E. Beal, *Proletarian Journey* (New York: Hillman-Curl, 1937) および Dee Garrison, introduction, *Strike!* by Mary Heaton Vorse (1930; Urbana: University of Illinois Press, 1991) に詳しい。
5. ギャストニアのストを舞台にした小説は *Strike!* の他に以下のものがある。Sherwood Anderson, *Beyond Desire* (New York: Horace Liveright, 1932); Grace Lumpkin,

- To Make My Bread* (1932; Urbana: University of Illinois Press, 1995); Fielding Burke (Olive Tilford Dargan), *Call Home the Heart* (1932; New York: Feminist Press, 1983); Dorothy Myra Page, *Gathering Storm: A Story of the Black Belt* (New York: International Publishers, 1932); William Rollins, *The Shadow Before* (New York: Robert M. McBride, 1934).
6. Mary Heaton Vorse (1874-1966) の生涯と左翼運動との関わりについては、Dee Garrison, *Mary Heaton Vorse: The Life of an American Insurgent* (Philadelphia: Temple University Press, 1989) がある。
 7. Barbara Foley はその著書 *Radical Representations: Politics and Form in U. S. Proletarian Fiction, 1929-1941* (Durham: Duke University Press, 1993) の中でプロレタリア小説を 1. Proletarian fictional autobiography 2. Proletarian bildungsroman 3. Proletarian social novel 4. Collective novel に分類し、*Strike!* は collective novel に属すると述べているが、Vorse の分身たる新聞記者 Roger Hewlett の存在に注目すると bildungsroman の要素もあると私は考える。
 8. Vorse を含めた女性作家によるプロレタリア小説を分析して、男性中心的な 1930 年代の左翼運動の中で女性活動家の感じた疎外感や不満および階級とジェンダーの問題について論じたものとしては、*Labor and Desire: Women's Revolutionary Fiction in Depression America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1991) や Laura Hapke, *Daughters of the Great Depression: Women, Work, and Fiction in the American 1930s* (Athens: The University of Georgia Press, 1995) などがある。この問題は本稿では扱えなかったので別の機会にとりあげたい。
 9. Vorse, *Strike!* 235-36.
 10. Garrison, introduction to *Strike!* xiv-xv.
 11. 裁判の経過と保釈からソビエトへの逃亡に至る事情については Beal, *Proletarian Journey* 179-221 に詳しい。さらに、Howe and Coser, *The American Communist Party* 257-61 も参考になる。
 12. Vorse, *Strike!* 27.
 13. *Ibid.* 168.
 14. *Strike!* の書評には、Sinclair Lewis, "A Novel for Mr. Hoover," *Nation* 131 (October 29, 1930): 474; Walt Carmon, "*Strike!*," *New Masses* 6-8 (November 1930): 18; Murray Godwin, "Good Proletarian Realism" *New Republic* 65: 113-15 などがある。全体としてストライキの実態を写實的に伝えたものとして好意的な批評が多かった。Michael Gold はブック・ジャケットの帯に載った推薦の辞でこの作品を "a burning and imperishable epic" と賞賛したが、Lewis は、Gold の推薦はかえって批評家や読者に偏見を与え、"a clear, honest, and often dramatic account of the

horrors of the Southern textile mills”に対する正当な評価を損なうのではないかと述べている。

15. William Rollins, Jr. (1897 [8?]–1950) については詳しいことは知られていないが、マサチューセッツ州ベルモントに生まれ、ボストン大学で学んだ。第一次世界大戦では、アメリカ野戦衛生隊の一名としてフランスに赴く。*The Shadow Before* が代表作で、ハリウッドで映画のシナリオを書いたこともある。（“Obituary for William Rollins, Jr.,” *New York Times* 16 June, 1950: 25.）さらに、Alan Wald, *Writing from the Left* (London: Verso, 1994) によれば、Rollins は “Left Thirties writers out of the Black Mask School of hard-boiled detectives” の一人で、*Midnight Treasure* (1929)、*Murder at Cypress Hall* (1933) などの推理小説、スペイン内乱についての *The Wall of Man* (1938)、さらにスリラー *The Ring and The Lamp* (1947) を書いた (104)。1930年代の推理小説とプロレタリア小説の関係に触れたものとして、David Madden, ed., *Tough Guy Writers of the Thirties* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1968) がある。本稿では残念ながら、この興味深いテーマを掘り下げることが出来なかった。
16. Philip Rahv, “The Novelist as a Partisan,” rev. of *Parched Earth*, by Arnold B. Armstrong and *The Shadow Before*, by William Rollins, *Partisan Review* 1 (April–May 1934): 50–52. この中で Rahv は、“psychological realism” を革命的小説の中で用いる手法が、Harry や Thayer などの人物造形にリアリティーを与えていると述べ高い評価をしている。この小説の出版当時の評判は高く、Vorse は書評 “The Feeling of a Strike,” *New Masses* (April 17, 1934): 26 の中で “His book seems to me by far and away the best of the books on the strike” と評している。また、John Dos Passos もその書評 “The Business of a Novelist,” *New Republic* 78 (April 4, 1934): 220 の中で、「リアルな登場人物を創造し、彼らを時代の渦に投げ込むことで歴史の一断面の記録を正確に伝えている」と最高級の賛辞を送っている。
17. Rollins, *The Shadow Before* 387; 389.
18. *The Land of Plenty* の出版当時の好意的な書評としては次のものがある。John Dos Passos, “The World We Live In,” *New Republic* 79 (May 16, 1934): 25; Philip Rahv, “‘Land of Plenty’ Sets New Standards for Revolutionary Novel,” *Daily Worker* (May 14, 1934): 5. 出版後の長い時期を経て改めて評価しているものに、Malcolm Cowley, *The Dream of the Golden Mountains* (Hamondsworth: Penguin, 1981) 262; Jack Conroy, “Robert Cantwell’s *Land of Plenty*,” *Proletarian Writers of the Thirties* 74–84 などがある。
19. ワシントン州アバディーンの製材工場でのストを扱った小説には *The Land of Plenty* (1934; Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972) の他に、Louis

- Coleman, *Lumber* (1931; New York: AMS Press, 1976) と Clara Weatherwax, *Marching! Marching!* (New York: John Day Co., 1935) がある。
20. 製材工場でのストの背景については、Christian Suggs, introduction, *Marching! Marching!* by Clara Weatherwax (Detroit: Manly Book, 1990) に詳しい。
 21. Cantwell の工場での経験と小説との関係については、Conroy, “Robert Cantwell’s *Land of Plenty*” を参照してほしい。なお、Robert Emmett Cantwell (1908-1978) については、次のようなことがわかっている。1929年から1935年まで小説を書くかわら、フリーランスで *New Republic* などに寄稿した。その後、*Time* や *Fortune* などの編集者になり、次第に左翼戦線を離れていった。1940年頃からは伝記や文芸批評に専念するようになった。*The Land of Plenty* 以外の小説としては、*Laugh and Lie Down* (1931) がある。
 22. 例えば、闇の中で方向性を失って、転んだり、逆方向に進んだり、落下する人々は “nightmare unreality” [Cantwell, *The Land of Plenty* (New York: Farrar and Rinehart, 1934) 154] の中にいたと表現され、その不条理な世界を行き来する人々の姿は、シュールリアリスティックと呼べるのではないかと私は考える。
 23. Robert Cantwell, “Authors’ Field Day: A Symposium on Marxist Criticism,” *New Masses* (July 3, 1934): 27.
 24. Rideout, *The Radical Novel* 179. 確かに、1930年代のストライキの中には、労働時間短縮、賃金引き下げ撤回、解雇撤回、組合の承認など組合側の勝利で終わったものも多かったので、Rideout がストライキ小説の悲劇的な結末に疑問を持ったのも不思議ではない。現実にはアバディーンでの製材所ストは1935年までには組合側の勝利で終わっている (Rabinowitz, *Labor and Desire* 101)。
 25. 例えば、Daniel Aaron は、*Writer on the Left* (1961; Oxford: Oxford University Press, 1977) の中で、“The strongest writers of the thirties used politics and were not used by it” (392) と述べ、政治を超えることのできた作家として Dos Passos, Hemingway, Lewis, Dreiser, Steinbeck, Wolfe などあげている。
 26. Chester E. Eisinger, “Character and Self in Fiction on the Left,” *Proletarian Writers of the Thirties* 158. Eisinger はプロレタリア作家の定義は曖昧だとして、1930年代から40年代にかけて、マルクス主義あるいは共産党などの影響をなんらかの形で受けた作家を含めて広くプロレタリア文学を論じている。
 27. *In Dubious Battle* の時代的背景については、Nelson Manfred Blake, *Novelist’s America: Fiction as History, 1910-1940* (New York: Syracuse University Press, 1969); Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1958); Warren French, *The Social Novel at the End of an Era* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1966); 渡辺一清『アメリカ現代小

説論』(大阪教育図書、1994)などを参考にした。チュラレー郡のタガス桃園で起きた750人の労働者のストライキと、オルグのPat Chamberについては、Daniel, *Bitter Harvest* 156-60が参考になる。Steinbeckは、このピーチ・ストライキ以外にも、レタス農園やぶどう園の労働者および綿摘み労働者(季節労働者は、果樹の季節がおわると南下して綿摘みをした)などのストを合成し小説の素材にしたものと思われる。興味深いことに、現実のピーチ・ストライキは、時間給の引き上げとスト労働者の職場復帰を条件に妥協が成立し、暴力が使われることも比較的少なかったという。

28. John Steinbeck, *In Dubious Battle* (Harmondsworth: Penguin Books, 1979) 210-11.
29. Rahvは*The Shadow Before*の唯一の欠点は、ストが自然発生的に起こりすぎて、オルグのMarvinの存在がばやけ、“the conscious element in the leadership”が強調されていないことだと指摘している[Rahv, “The Novelist as a Partisan” 52.]
30. Mary McCarthyはその批判的な書評“Minority Report,” *Nation* 142 (March 11, 1936): 326-27の中で、この作品が“a topnotch proletarian novel”ともてはやされているにもかかわらず、実際のストライキは“off stage”で行われ、“a Socratic dialogue between the two organizers”が小説の大半を占めていることに違和感を表明している。
31. John Carey, *The Intellectuals and The Masses* (London: Farber and Farber, 1992) 3-45. この著書の中で、彼は、1930年代のヨーロッパの知識人に見られた“mass man”と“the dictatorship of the mass”への恐怖感、嫌悪感を指摘し、また大衆を“scientific specimens”として分析の対象にする傾向が生物学者や社会学者に広まったことを指摘している。これに関係して、前掲のMcCarthyの書評で、彼女が“Men in a crowd, he declares over and over again, behave differently from men by themselves. How a crowd is different, why a crowd is different, he cannot say; he is content to assert at great length that a crowd likes the sight of a little blood”と述べ、Steinbeckが大衆に抱いていた先入観ないし漠然たる不安感を批判しているのは興味深い。
32. *In Dubious Battle*を優れたプロレタリア小説と見なした書評には次のようなものがある。Harry Thornton Moore, “Though the Field Be Lost,” *New Republic* 86 (February 19, 1936): 54; William Rose Bennet, “Apple Pickers’ Strike,” *Saturday Review of Literature* 13 (February 1, 1936): 10.
33. この短編は、1936年に雑誌に掲載され、1938年に*Long Valley*に収録されたものである。作品の中で少年が頭の中で、祖父の西部開拓の英雄的時代を思い起こすところで、“A race of giants had lived then, fearless men, men of a staunchness unknown in this day. Jody thought of the wide plains and of the wagons moving

across like centipedes. He thought of Grandfather on a white horse, marshalling the people" [*The Complete Works of John Steinbeck*, ed. Yasuo Hashiguchi, vol. 6 (Kyoto: Rinsen, 1985) 297] と書かれている。この短編で表現されている強いリーダーへの憧れは、*In Dubious Battle* にも見られる。これに関係して、廣瀬英一氏と小田敦子氏が共訳なさった『疑わしき戦い』（大阪教育図書、1997）の訳者解説の中で、小田氏がストライキは「経済闘争であるだけでなく、集団化した人間の持つ力との戦いでもある」（458）と述べておられるのは興味深い。

34. 共産党の極左時代のレトリックと階級闘争論については、Bernard K. Johnpoll, gen. ed., *A Documentary History of the Communist Party of the United States*, vol. 2 (Westport: Greenwood Press, 1994) が参考になる。なお、中産階級出身の作家たちとラディカリズムとの関係については、拙稿「1930 年代とアメリカ知識人の挫折——ラディカル・ビジョンの崩壊」『アメリカ研究』24 (1990) および「アメリカ知識人の試練——F. O. マシーセンへのレクイエム」上智大学アメリカ・カナダ研究所編『アメリカ文化の原点と伝統』（彩流社、1993 年）などで扱っている。
35. Sacvan Bercovitch, *The American Jeremiad* (Madison: University of Wisconsin Press, 1978).
36. アメリカのプロレタリア小説における知識人の自画像に関しては、拙稿「知識人の自画像——プロレタリア文学」後藤昭次編『文学と批評のポリティクス』（大阪教育図書、1997）で検討を試みた。
37. Gene Wise は、*American Historical Explanations: A Strategy for Grounded Inquiry* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1980) の中で、Lionel Trilling, Reinhold Niebuhr, Richard Hofstadter などを、もはや歴史の直線的前進運動や善悪二元論を受け入れることが出来なくなった “counter-progressive historians and critics” と呼んでいるが、Steinbeck にも、彼らと共通する感性があったのではないだろうか。ニューディールの左からの支持の立場になった共産党の「人民戦線」時代に *The Grapes of Wrath* が出版され、進歩派、人民派の代表のように持ち上げられた点では、彼もまた意図に反して「政治に利用された」面もあったように思える。